

歴史哲學の問題 (完)

大西友太

三 復興するカント哲學の根本課題

——神の理念の自由の理念への辯證法的先驗論理の演繹について——

私は前節でカント哲學が實踐理性の優位の立場をもつてヘーゲルの思辨哲學の後に復興すべき點について論じた。終りの方で論じたところには紙數の關係があつて意をつくさぬところがあるが、本節で論ずるところでこれを補ふやうにしたいと思ふ。すでに述べたやうにカントは思辨を超越する實踐理性の優位においていよく心その物の自由の上に立つ哲學に進んでゆくのであつて、この方面でカントが思辨哲學で見ることのできない直接的自己意識を發見するのみでなく、思辨哲學の宇宙的眞理をもつてその自己意識の否定契機として内にもつことを明かにすることは最も深く注意される。しかしかうなるとカントが自由と神との關係を考へ、自由の二律背反を解決して、永久善の實在を考へる場合に、『單なる理性の限界的における宗教』においてのやうに思辨的同一哲學に止まるといふことは大なる矛盾でなければならぬのであつて、カント自身折角思辨哲學を超越しながら再びこの哲學に陥るものとして實踐理性の立場は解消して終はねばならぬことになる。カントとしては大なる矛盾不徹底であるといはねばならぬのであつて、折角思辨哲學を超越して實踐理性優位の哲學を發見しながら、その優位の自由をもつて神の必然の思辨に捧げて終ふことにならねばならぬやうになる。カントとしては是非この問題を何等かの形式で解決せねばならぬ。私は本節でこの問題について考へたいと思ふのであるが、方法論的にはこの問題はカント哲學としては自由の二律背反を解決して

永久善の實在を肯定する中に見られる精神及び方法をその背後に徹底してカント哲學の自由それ自身が思辨的同一哲學にいたるとともにこれを突破して絶対自由を肯定すべき論理を有することを明かにする外ないのであつて、具體的には純粹理性批判の力作たる先驗辯證論以來の辯證法的先驗的圖式概念を徹底して神の理念の自由の理念への辯證法的先驗演繹論の形式をもつて解決されねばならぬ問題であることは私のこゝに豫め約束しえるところである。したがつてそのかぎりではこの論文で私は前論文、「カントの先天總合判断の最高原則について」の考へ方を進めて右論文で論じたところを最後の點で補ふことにもなる譯であるが、カントの先驗統覺の對象はこの場合においては客觀的實在の歴史的世界としてこの辯證法的先驗論理において演繹せられるものとなる。これが本節における論旨である。

そのかぎりにおいてカントの實踐理性の自由の制約は客觀的歴史的世界形成の制約となるものとして絶対自由であるのであつて、認識論的に見るときはこの場合に見る演繹論はカント哲學の問題として「先驗統覺と歴史的世界」として豫て示しておいた題で論じてよいのであるけれども、特に復興するカント哲學の根本的課題を明かにするために前掲のやうに題名を改めておいた。

普通にはカント哲學の先驗統覺は先驗論理の演繹論において見らるべきものと考へられておるけれども、私の別の論文で詳論した如く、先驗辯證論を見れば分るやうに、二律背反を通して見られる先驗論理として辯證法的なる點に最大の特徴をもつておるのである。無制約者の理念の先驗演繹を考へる場合に、無制約者といふことをもつて無限の時間の總體性を通して考へるかぎり、二律背反といふことは有限を無限の同一性に歸するものとなるから思辨的同一哲學に終るのが關の由であつて、辯證法的否定の事實を認めるにはいたらぬのであるけれども、カントには時間の總體性に對してなほその背後に空間の全體性を考へる點で思辨的同一を全體の否定の辯證法的關係に進めて考へるのもつて先驗辯證論の根本的特徴とする。したがつてカントの先天總合は獨立の自我と客觀的世界との辯證法的先驗論理の演繹となるのであるが、この辯證法的考へ方は實はすでに先驗分析論において時間的繼起の因果律の原則に對し

て同時存在の實體の相互關係の原則について考へるとき以來すでに準備せられてゐるところであつて、突然現はれてくる問題ではない。カント哲學では時間空間の圖式論を手引きとして因果に對する實體の辯證法的否定を認めるとき以來鍊り込んでくる思想であつて、自然カントでは實踐理性の優位をもつて復興する場合の自由の理念の先驗演繹が辯證法的となり、自由の二律背反といふことは自由と必然の相互媒介の全體否定の辯證法的關係において考へらるべき問題となり、心術の革命において人間性の否定と神性との關係を考へる場合においても同様の辯證法的關係において考へらるべき問題となるべき管なのである。したがつてカントがこの問題を論じた實踐理性批判、殊に「單なる理性の限界内における宗教」においては神の要請論よりも以上に神の理念の自由の理念への辯證法的先驗論理の演繹論が鮮かな形態をもつて現はれ、先驗辯證論以來の辯證法的先驗哲學の特色を發揮すべき論理の必然をもつてゐるのであるが、この特色を宗教論において徹底せぬのがカント哲學の最大の缺點であるといへる。

この辯證論的思想はこの宗教論における善原理の悪原理に對する鬭争及びその勝利論から見ても推察しえるやうにカントにはまつたく無かつたといふことは言へぬ。後に述べるやうに最後の先驗哲學の問題としてこの辯證法的演繹論をなすべき健康と齡が與へられなかつたのであると想像される。カントは先天總合判斷の制約を特に重要視すべきことを高調せる二版において、觀念論々駁を加へて客觀的獨立の事物を肯定した上で先驗辯證論においてこの事物の演繹を論じ、神のイデアにおいて一切の總合判斷の諸制約の總合的統一を見るところにその演繹論の完成を見ようとしてゐるのであつて、そのかぎり實際上單なる先驗論理ではなく辯證法的先驗論理が深く喰ひ込み、單なる形式的先驗論理に對して事實を否定契機にもつ辯證法的先驗論理が深く注意されてゐるのを見る。殊にこのことは實踐理性において著しく、カントが思辨的理性を克服する實踐理性の理念の先驗論理においては、自由の否定契機である必然の事實に最も深く注意して攻究を進めてゐることは隠れもない事實であつて、カントが時間の總體性に對する全體性を承認する時間空間の辯證法的圖式を媒介にして思辨的理性に對する實踐的理性の問題に進み、この理性の自由におい

て直接自己意識を発見するとともにその否定契機である身體を発見することが最も深く注意すべきこと柄である。これは内感の時間空間の辯證法的圖式を媒介にして自由の理念の辯證法的演繹を見るカント哲學では必然的なる歸結でなければならぬのであるが、自由のイデアの辯證法哲學といつてもこの圖式を省みぬヘーゲルの哲學においてはこれと異なり、精神の直接態における自己疎外の他在といふことを自然と見るに止まつてゐる。この點は私は前掲の論文「カントの先天總合判斷の最高原則について」において詳論しておいたからこゝではこれ以上に述べぬが（本誌、二六七號、一六一七頁）、ヘーゲル哲學としてはこれは根本的缺點でなければならぬのであつて、もしヘーゲルがこの點に注意するならば身體を否定契機とする精神の自由が根本問題となり、身體と精神の辯證法的相互關係の辯證法哲學の根本的特色を作らねばならぬ筈である。

この點でカントの實踐理性性の自由の二律背反は辯證法的に深く觀察されてゐる。ヘーゲルは辯證法哲學として精神現象學において意識の絶對自覺に達し、そこから實在の辯證法哲學を考へるのであるけれども、私のすでに詳しく論じたやうにイデアの自己否定においてエクジステンツを見ぬから自己意識が第一明かにならねば、またその否定契機である身體の直接的事實について考へる辯證法的先驗論理をもつべき論理的必然はない。この點でヘーゲルはカントが先驗辯證論の二律背反を考究するにあたつて心それ自體の自覺をその辯證法的圖式に媒介して機械作用を精神それ自體と辯證法的に結合せる身體として觀察せるに學ばねばならぬ。有限にして無限なる人間精神では機械作用の必然は自由に統一され、自由は機械作用によつて實現される外ないといふのがカントの實踐理性性批判における根本的信念である。とツキンデルバンドはその近世哲學史でいつてゐるけれども、この機械作用の必然と精神の自由とはカントでは直接身體の否定契機を通せる意識の辯證法的自由において深く觀察されてゐるのであつて、カントの實踐理性性は實は身體と精神との二律背反に基く辯證法的先驗論理をもつて一貫せる特徴をもつてゐるのである。カントにおいては我々人間の生活では道德的自由と機械作用とは二つの對立契機であるから善惡の對立といふことは免れがたき運命で

あつて、自由の格律は如何なる場合においても常に否定をそれ自體の中に含んでゐるのみでなく、自由の實現はその否定を通して辯證法的になされねばならぬのであるから自由の歴史は悪から初まるとさへいはねばならぬ。カントはこのことを『世界史の臆測的起原』の中で明かにしてゐる。我々には意志の力をもつて如何ともすることのできない根本悪が宿命として意志の自由の根本善につきまとうてゐる。このことは自由における神の啓示がその自己否定的な點において積極的に裏づけられるところであつて、我々はたゞこの否定の否定において神それ自身の自覺に返る點でこの二律背反を解決しえるのみである。即ち理念的に二律背反である人間性その物の否定により、カント的には心術の革命によつて解決しえるのみである。

有限精神から無限精神への問題はヘーゲルのイデアの思辨的同一哲學において十分に考へられてゐるところであるが、ヘーゲルにおいては無限精神における有限精神の解決である。我々は有限精神において解決せねばならぬ。我々人間の生活は現實的である以上はこのことは根本的に要求せられてゐるのであつて、この要求を充たすところに我々は初めて現實具體的に人間の地上生活における生命ある道徳を見ることができぬ。イデアを見てその自己否定であるエクジステンツを見ぬヘーゲルにこの問題の解決のないのは敢て怪しむに足らぬが、カントは實踐理性の優位をこのエクジステンツにおいて見るものとしてヘーゲルの思辨を超越して精神それ自體の自由を見るときもにその否定契機である身體を見るのである。故にそのかぎりカントにおいては我々人間の生活では根本悪と必然は機械作用の身體に基くといふよりも以上に、自由その物の自己否定により、神の自己否定によつて興へられたる自由の根本的性格であるといはねばならぬのであつて、人間の自由は神の新らしき固有の存在である實存の特徴であると同時に必然と悪の闇き影をもつて包まれてゐる。我々人間では自由と善とは根本的であると同時に必然と悪もまた根本的であつて、自由は必然を、根本善は根本悪を否定契機として内にもち、反對にまた必然と根本悪とは自由と根本善とを否定契機として内にもつてゐるのである。まづたく辯證法的である。我々人間は無限の努力を通して辯證的に根本善と自由とに

向つて向上せねばならぬ。しかし我々人間はこの努力を重ねて道德的進歩が深くなればなるほど根本悪もまた深くなり、その矛盾は深刻になる。自由なる理智的行爲によつて根本善を實現することが目覺しく進歩せるものにおいてはその行爲によつて義務に背反し根本悪に轉落することもまた深刻である。大善の人は大悪を犯すことがあるのである。パウロは我欲する善はこれなせず、欲せざる悪はこれをなすといつて深く戰慄し嘆息したが、これが抑も神の自己否定によつてその永遠に不變不動の愛を血の心臓に高鳴らせるとともに、これを否定せる恐るべき残忍を與へられた人間の運命である。しかし神は自己否定の否定において本來の善に返り自由に返るべき一層根本的な運命を我々人間に與へてゐる。神を信する者はパウロにしたがつて無限に道德的に努力しながらなほその二律背反の人間性をその物を否定して神に歸らねばならぬ。これが懺悔であり良心の聲に聞くものである。ことは言ふまでもないところであつて、カントの心術の革命がこれであることは勿論である。我々人間は宗教的にパウロの考へてゐるやうに悔ひ改めることによつて神から作られた人間の本來に立ち返り良心の聲に聞かねばならぬのであるが、これを思辨的同一哲學において觀想するのではなく辯證法的實踐において實行するのがカント哲學の本來である。これがカントの辯證法的先驗論の演繹の眞理なのである。人間性の否定的革命によつてたゞ思辨的に人間が神と同一化されるのみでなく、その同一におかれたる人間に對する神の啓示によつて辯證法的先驗論の哲學がなければならぬ。啓示の哲學がカント哲學として辯證法的先驗論の演繹論において見られねばならぬのである。

實踐理性の自由は直接身體を否定契機として實現せねばならぬけれども、その自由の實現はたゞ理念的に必然と根本惡とを去りえるものでなく、根本において人間性を脱しえるものではない。この實現の時間の無限の極限においては人間性をもつて神性に結合しえる同一性は考へられるけれども、まづたゞ觀念論的抽象論であつて現實的なる事實ではない。この事實としては永遠に達すべからざること柄である。カントが心術の革命を説いたのは時間の總體性の極限においてではなく、これを超越する否定の全體的空間性においてである。カントの先驗辯證論はこの空間の全體

とその自己否定による時間の永遠性と矛盾性を圖式とする辯證法であることは特に注意さるべきこと柄である。人の知る如くカントは實踐理性批判の「純粹實踐理性の分析論の批判的解明」において、道徳的決意においては時を問はぬ。曾てあつたことであつても、今現にあることであつてもその時間的差別は言はぬ。たゞ純粹なる決意が問題となるのみであるといつてゐる。これは道徳的決意では時間を超越する空間において永遠が問題となり、すべての道徳を思辨的同一哲學で考へることが第一必要であることをいふのである。心衛の革命といふのは論理的にはこの同一哲學において考へられる問題である。しかし現實の道徳はかういふ思辨的同一道徳の決意が現實の實際生活を如何に規定し權威するかといふことにあるのであつて、道徳が宗教に止揚せられて超越的に永遠となるのみでなく、その宗教が道徳に内在するものとして實存的現實の永遠の道徳となり、永遠に不變不動なる神の愛が人間の心臓に高鳴り、我々人間の地上生活において神の永遠の愛がその絶對靜から動に轉じて現實の道徳において高鳴る宗教が最も必要なものと柄であつて、この現實の宗教的道徳を明かにするのが哲學の最後の課題でなければならぬのであるが、この點でカントの先驗哲學はその辯證法的なる點において思辨的同一哲學以上にその特色を發揮し、實存的歴史哲學としてその特色を發揮してゐるのである。

かう考へると『單なる理性の限界内における宗教』において傳統の思辨的同一哲學を超越せるカントが思辨的同一哲學に陥ることは不可思議のやうに考へられぬではない。しかし道徳の二律背反はそれ自體こゝに達するところにその解決の第一歩を求めるの外ないことは我々の注意せねばならぬところであるとともに、カント哲學の先驗辯證論以來の根本的方法及び精神によるときはこの思辨的同一の立場におかれたる人間性その物に對して神が直接的自己否定によつて自己を啓示し、人間性をもつて神性の新らしき固有の存在となす點において人間性をもつて思辨的同一以上に神その物のエクジステンツとして新らしく神の實存において活動せしめ、永遠の愛を人間その物の血の心臓において高鳴らせるものならしめる。この點において我々はカント哲學の『理性の限界内における宗教』において見る神と

人間の思辨的同一哲學に對する辯證法的圖式の活動する影響は非常に深いことを知らねばならぬのであつて、私のこの論文の初めにあたつて試みたヘーゲルのイデアの**お**いてある空間についての分析がカント哲學の最後の問題とする神の思辨的同一哲學についてなされるべきことをカント自身はすでに示唆してゐるのである。ヘーゲルの思辨とカントのこの場合の思辨とは異なる。カントはヘーゲルの思辨を超越せる上の思辨であるけれども、兎に角思辨であるからカントはヘーゲルのイデアの自己否定においてエクジステンツの**新**らしき哲學を要求されるやうにエクジステンツの**新**らしき人間學的哲學を要求されてゐるのである。こゝにカントはその思辨的同一哲學において理念とする神の自己否定の睿智的空間及び時間を辯證法的圖式としてその理念の人間の自由への辯證法的先驗論理の演繹論の可能根據を方法的に示してゐるほど哲學上注意すべきこと柄はないのであつて、カント哲學において我々は初めて積極的に神の永遠の愛が人間の自由を高鳴れる永久善のホモ・ノビリスを見ることができる。カント哲學における最高原則はこの場合に見るホモ・ノビリスの心臓に高鳴る最高善の原則として實踐的に我々人間に道德的經驗を可能ならしめるものであるが、辯證法的先驗論理の演繹論の可能根據をなすものとして思辨的同一哲學における道德的直觀よりも深き根據における經驗の原則としてその辯證法的なるところに最大の特徴を有する。客觀的獨立の道德的世界を認め、宗教に根源する道德的世界の隨所に主となる歴史的主體の世界を認めながらこれを超越する主觀の客觀形成の制約を認めるのがカントである。そのかぎりカント哲學の先天總合判斷の最高原則は先天的といふよりも先驗的であるが、たゞ先驗的であるのではなく、辯證法的先驗的なるところに最大の特徴を有し、主觀の制約が客觀の制約であるといふことゝ客觀の制約が主觀の制約であるといふことをカントは神と人間との最後の最上の辯證法的關係において認め、否、この辯證法的關係において認められるホモ・ノビリスとしての人間とその歴史的世界との辯證法的關係の純粹活動において最高原則を見るにいたるのがカントの本來でなければならぬのである。

カントの思辨的同一哲學的に神に止揚せられたる自由の人間は神の**お**いてある想像的空間に無差別的に止揚されて

ゐるのである點から見るときは、その空間はエックハルトの到る處に中心をもつ周邊なき無限大の球において見る空間と考へることができらるであらう。この球は無限の内容を無差別的にそれ自體の中に有せるものであるが、その自己否定によつて自己が自己を最も完全に見る點においてこの空間の球はその中心なき無限大の周邊なき球から轉じて一定の中心をもつ無限大の無限数の球となる。いはゞ無の無に媒介して規定的中心を無限にもつ無限大の球となるのである。神が自己否定によつて自己を見るエクジステンツにおいては到る處を中心とせる無限数の無限大の球を見るやうに無限数のホモ・ノピリスの人間を見るのである。そこには圖式的に見るときは辯證法的に一切の人間をイデアの同一に止揚せる思辨的空間とこの空間の自己否定によつて超越的に内在する實存的時間とが辯證法的相互否定の内の關係で働いてゐるのであつて、イデアの自己否定において見られるエクジステンツとしての自己意識においてはこの時間空間——かゝる時間空間は神の時間空間として睿智的なるものであるが——を圖式的媒介にする神の自由への啓示の辯證法的先驗論理の演繹論が成り立たねばならぬ。カント哲學ではすでに述べた如く實踐理性の自由は純粹自己意識の自由であるけれども、なほ思辨哲學の有に對する無の立場にある自由である。有無の相對性を脱すること能はぬ。自由は根本において二律背反である。これを解決して絕對自由に達するにはこの背反の人間性を超越すること能い。これがカントの心術の革命であつて、こゝにカントは絕對無において思辨的同一的に神祕的超越の神を考へるのであるが、その思辨的同一の神の神においてある睿智的空間の辯證法的性格は必然的に神をそれ自體の自己否定において人間に啓示する時間を辯證法的先驗論理の演繹論において開展するのである。カントのこの演繹論は道德から宗教へと宗教から道德への相互媒介の無限の純粹活動である。神は永遠に達すべからざる理想であるとともに永遠に達せる法悦の無限活動である。無限價値の無限進歩である。道德とか教育とかいふことはこゝで初めて本質的に成り立つ。一口にいふならば人生が成り立つのであつて、カントはこの點から出發してホモ・ノピリスの正しき人間の作る正しき歴史を見る點で無限に廣くして且つ深き歴史哲學の領域を開いてくるのである。

カントは善原理の人間支配權について論ずる場合に特に善原理の人格化問題について論じ、キリストを歴史上のキリストから人類の一般的哲學原理にまで進めてイエス・キリストを觀察し、神の愛の高鳴れる血の心臓をもつホセ・ノビリスを明かにせんとしてゐる。中世の神祕家の考へるホセ・ノビリスを哲學的に明かにせんとしてゐるのであるが、これは哲學的には神の理念の自由の理念への辯證法的先驗演繹論において見られること柄である。カントの『單なる理性の限界内における宗教』ではこの演繹論を見るのが本来であると思ふが、カントがこの著を公にしたのは一七九三年であつて、この頃からカントの健康は思はしくなく、大學の講義は廢したほどである。カントはこの書における根本目的を明かにするためにいよ／＼啓示の論理を明かにし、先驗哲學の立場から神の理念の自由の理念への辯證法的先驗演繹論をなすにはいたらなかつたものと考へられる。實際カントが純粹理性批判において先驗分析論の論理の根柢に進んで先驗辯證論を試みたことを自己は大なる勞作であり、したがつてまた大なる功績であるが、この辯證論から實踐理性批判の二律背反の辯證論にいたるときは、事實上身體をもつ人間の二律背反論として大なる苦心の研究を重ねてゐる。このカントから見るときは『單なる理性の限界内における宗教』において實踐理性批判の辯證法的意味を宗教的に一層深くしてゆく點で啓示の論理について思辨的同一哲學以上に辯證法的先驗論理を明かにすべき筈であつたのであるが、當時の哲學としてカントが啓示の思辨哲學に達するまでには蒞の途を拓かねばならぬ勞苦はあまりに多かつた。したがつて自然今日から見るときはその所論に紆餘曲折は多からざるをえなかつたのであるから、カントがこの書を公にするまでには普通の哲學者なればまつたく精根のつき果てゝ終ふことであらう。カントが單なる理性の限界内における宗教において神の啓示について思辨的神祕論に終つたことは批判的先驗哲學としては遺憾なことであるけれども、當時のカントとしては已むをえぬことゝいふの外ないであらう。しかし大體の筋途の明かにされる今日の我々はこれを明かにせねばならぬ。こゝにキリストにおける啓示が一般人類における啓示の必然となり、人類一般の救済が哲學的必然となりえる。私はカントがキリストをもつて人類一般の人格的原理となさう

とする理性的宗教論はこゝにいたつて初めて哲學的にその目的を達し、神祕家のホモ・ノビリスを辯證法的先驗論理において現實的に明かにしえるものと思ふ。

カントが自由の理念への神の啓示を超越的神祕的に考へたについては（『單なる理性の限界内における宗教』 *Von dem Geheimnis*）なほ考ふべき問題が残されてゐねばならぬ。カントはこゝではヘーゲルと同様に獨逸哲學者として思辨的神祕的であるけれども、神にまで高められたる人間は思辨的に神と同一なるものとして神の世界では無差別の同一において存在すると同時に、一切の差別性を有せるものとして神の否定契機である。神の新らしき固有の存在を示すエクジステンツでなければならぬ。人間は神においては平等であつて、一切の個性なきものが地上において個性を有するのではなく、神において平等であると同時に絶對的個性を有するものでなければならぬ。これを地上の存在に明かにするのが哲學である。ヘーゲルの *an und für sich Sein* を *an und für uns Sein* とするところに我々の哲學がある。人間は神を自由の純粹性の中にもたねばならぬ。演繹論の辯證法的矛盾性では神の理念は澤澤されるところと思へばその一つの屬性の現實化であるに過ぎぬ。しかしこれは時間の總體性において考へられるやうな問題ではなく、全體的不定性において考へられる問題であつて、辯證法的純粹活動では創造の哲學的行爲を次ぎから次ぎへと持續するのである。行爲は辯證法的でなければならぬのであつて、私はこの創造の辯證法においてカントの先驗辯證論以來の辯證法的圖式概念が徹底するとともに、先驗哲學の先驗演繹が最後の意味で徹底し、カントが神と人間との關係において思辨の同一哲學に陥れる先驗哲學の矛盾不徹底を救ひ、その哲學體系を一貫徹底せるものたらしめることができると思ふ。プレスナーは *Krisis der transszendentalen Wahrheit im Anfang* において認識作用も對象もそれ／＼獨立を許すのでなければ認識の眞理問題は其の意味を失つて終ふといつてゐるが、カントは辯證法的先驗演繹論を立てる點においてプレスナーのこの意見を肯定するところに新らしく歴史哲學の領域に進むのである。

私は寡聞にしてカント哲學についてまたかういふ辯證法的先驗演繹論をなせるものあるを見ぬ。しかし私はカント

の先驗辯證論の根本精神はこの演繹論にいたらねばならぬと思ふ。私は西田先生が昭和六年本誌で「永遠の今の自己限定」について論ぜられてゐる中に見る永遠の今の自己限定には圖式的には明かに神の理念の自由の理念への辯證法的先驗論理の演繹論をなすべき可能を示唆せられてゐるものと思ふ。キリストが神の子として福音の說法者であるとか、聖書にキリストの福音が載せられて世に傳へられてゐるとかいふことは何等かの意味で神の啓示の論理が許されることでなければならぬであらう。福音の聖書は啓示の哲學を要求するものといへるが、私はカントの先驗分析論以來の論理の底にある先驗辯證論の精神及び方法を徹底するときは明かにこゝに達するものと考へざるをえぬのであつて、具體的にはカントの實踐理性において一旦到達せる思辨を超越する辯證法的先驗論理においてこの問題は最も根本的に解決せられると考へ、カント哲學は西田哲學の永遠の今の自己限定の中に見る時間空間の辯證法的關係を圖式とするときにその先驗辯證論を徹底するものと思ふ。先生は右の論文の劈頭にキリスト教では時間が完了せられたとき神はその子を送つたといふ、アウグスティヌスは時が完了するとは時が無くなることであると解釋した、キリストの誕生はすべての過去をなくして未來を生ずる現在である、エツクハルトは時において起つたもの又起るであらうものを現在の一瞬に引き寄せることが時の完了である、それが永遠の今といふものであつて、そこにおいては私が今物を見る如く新たに鮮かに萬物を神において知るといふことができるといつてゐると述べられてゐる。かく時において起つたものと又これから起るであらうものとをすべて現在の一瞬に引き寄せるについてはすべての意味で客觀的に獨立なる歴史的世界を超越し、その主體を超越する立場がなければならぬのであつて、そのかぎり絶對辯證法的にすべての時間を空間に呑み込むと同時にこれをそれから吐き出す矛盾的辯證法的性格の時間空間圖式構造をもたねばならぬ。勿論この圖式を媒介にするものはこの場合においてはすべての人間性を神性に媒介するともと神性を人間性に媒介するものの内容とするのであるから、一口に辯證法的圖式といつてもその内容は他の場合と異なり、したがつてカント的には先驗辯證論の體系をまつたく新しくするものでなければならぬ。私はカント哲學において純粹理性批

判における先驗辯證論に匹敵すべき先驗辯證論が「單なる理性の限界内における宗教」においてけなければならぬものと思ふ。これが哲學上の大事業であつて、カントはこれを完成するにはあまりに高齢であつたことは借みても餘りある。純粹理性批判において永久不滅といへる傑作を有するカントに對してかういふ問題をまで堅むことは堅むもの野望であつて、後世の學徒のなさねばならぬ事業であらう。我々はカントがこの事業を成し遂げてゐぬけれども、これを成し遂ぐべき論理的必然の方法論を示せることに満足し、これに注意する點においてカント哲學を徹底するとともにカント哲學の新らしき出發點を作らねばならぬ。

すでに述べた如く、エツクハルトが無を説き死を説いて人間が徹底せる死を通して神において再生すべきことを高調するのは宗教的には悔い改めて神の國にいたり神の恩寵をうくべきことを高調するのであるが、哲學的にはこれはなほ思辨的である。我々はこの思辨の同一的空間の自己否定により、したがつて無の無の辯證法的空間の時間においてエツクハルトのいふ神の恩寵の生命を見ねばならぬ。こゝにカントの辯證法的先驗演繹の論理がなければならぬのである。哲學としてはマイステルとしての彼の傳統の流出説よりも深く自己否定の死の問題を介せねばならぬ論理のあることはすでに述べたが、敬虔なるマイステル・エツクハルトはその理論よりも實際において深く宗教生活には入り、そのかぎりにおいてイデア的超越の思辨ではなく、エクステンツ的内在の實存において、神の人間における存在を見、その恩寵を見てゐるのであらう。それだけに哲學的にはカントの辯證法的圖式概念に媒介して先驗演繹論に開展する必要があると思はれるのであつて、エツクハルトのすでに述べた球の概念にはなほ深くカントの辯證法的圖式概念を通して考へるべき問題が存してゐる。我々はこれを通して考へるときにエツクハルトの人間の象徴としての球に於てホモ・ノビリスを見ることができ、イエス・キリストの哲學を見ることができ、神の自覚が人間における人格原理であることを知るのである。絶対靜が即動であるとか、作られたものが即作るものであるとか、または人間が即神であるとかいふことはよく言はれるけれども、こゝでは相即であるのではなく、絶対辯證法的實踐的である。

思辨的同一の相即哲學は許されぬ。エックハルトの神祕的信仰の深き宗教生活は神祕と實踐の辯證法的關係を實踐において實現するのである。先驗分析論の科學批判からこゝにいたるカントの人間を造る哲學はまつたく莊嚴である。

ありしカントから見るときはなほこの間に大なる隔りが思辨哲學として築かれてゐる。ありしカント哲學において神の理念の人間の自由の理念への啓示の問題は思辨的神祕的であつて、辯證法的先驗論理的に明かにされてゐるのでないからかういふ問題は積極的に明かにされてゐるのでない。「かのやうに」^{エッセ}の哲學となり、判斷力批判では合目的性の説明が無氣力的に煩鎖に陥つてその例證をあげるに努め過ぎてゐる觀のあるのはその結果であるといへるであらう。

思辨的同一哲學の神祕的超越の啓示において見るのでは自然我々人間の絶對自我及びこの自我の客觀的に形成する目的論的世界は神祕的觀念論となるから自然「かのやうに」の世界觀となり、目的論的實在世界の概念を曖昧にして神祕的超越的觀想に陥り、實踐的歴史的世界觀とは根本的に分離して終ふ。カント哲學が歴史派の哲學者から非難せられる根本理由はこゝにあると思ふ。しかし眞實のカントは先驗辯證論の辯證法的先驗論理の徹底において世界の目的論的實在を明かにすべき哲學の立場を要求し、この立場を實現すべき方法を明かにしてゐるのである。殊にカントは辯證法的先驗論理において身體とともに考へられ、その辯證法的形成原理としての自我である人間を明かにし、人間を通してこの世界を明かにすべき方法をもつてゐるのである。それ故にカント哲學においては實際「かのやうに」の哲學となるべき理由はないのである。カント哲學には中世の神祕家のホモ・ノピリスを現實となし、イエス・キリストを一般的人格原理とする深き眞理が存してゐる。佛教哲學の即身成佛といふやうなことも哲學的にはこゝに深く考ふべき問題をもつてゐる。いはゆる舉手動足凡是密印といふことはたゞ思辨的に神祕的眞理であるのではなく、これと同時に實踐的眞理であつてその辯證法的關係の無限活動を現實の地上生活の道德に發展するから言ふべからざる高尚性をもつのである。哲學はかういふ人間の必然的實現體系の根本問題を明かにし、その作る世界及び國家を明かに

するところに使命をもつてゐる。

私はいかにいふ點でカント哲學にはその狙ひであるイエス・キリストの哲學を明かにして神の子としての人間の存在を明晰にし人間悟性の原則を深く一新するものがあると思ふ。キリストをたゞ一人の歴史上の存在とせず人類一般の人格原理としようとするのがカントの狙ひであつて、カントはイエスを思辨的同一的に神においてある人間としてキリストと見るとともに、このキリストがイエスとして地上に生活することを明かにする點でヘーゲル哲學の *an und für sich Sein* の問題を *an und für uns Sein* の問題とする點において無限に深い眞理をもつと思ふ。思辨的同一哲學的なるかぎりにおいてはカントも他の哲學者と異なるところはない。その思辨的同一哲學的なる點において神の永遠の愛の不變不動の中に人類は止揚せられて終ふのであつて、永遠の絶對靜の人間は見られるけれども絶對動の實存的人間は見られぬ。人間のなる實踐の特質は見失はれて終ふ。その思辨的同一哲學の淨福は神の永遠の姿における不變不動の愛に見られる淨福として正直にいふときは人間の現實の心臓を離れたる淨福である。ここにカントも正直にいふときは根本的にまだ残された問題をもつてゐる。

ありしカント哲學は自由への神の啓示においては神祕的超越の思辨哲學に止つてゐるから「單なる理性の限界内における宗教」の「善原理支配の漸進的基礎づけの歴史的解明の一般的注意」この問題の解決はない。道德的究極目的の理念の實現となる時は自由は必然的に神聖なる神祕に連るといふ點で自由を思辨的同一哲學で神に結合するのがこの場合におけるカントである。

カントの實踐理性は、思辨的理性を超越せる點で人間の實存を明かにせる近世哲學の創始であることは最も注意すべきところであるけれども、カントはその實踐理性を啓示における人間の再生といふ點で再び思辨的同一哲學に終らしめるの不徹底に陥つてゐる。カントがいよ／＼その先驗哲學の立場を貫徹するには、その思辨的同一におかれたる道德的善のにおいてある睿智的察問その物の分析によつて時間との辯證法的關係を明かにし、睿智的時間察問の辯證法

的圖式に媒介して道徳から宗教への溯源以上に宗教から道徳への發展を明かにする外にこの矛盾不徹底を突破すべき哲學の途はないのであつて、こゝにカントは辯證法的圖式概念を媒介にして道徳から宗教への場合の神以上に、この神が如何なる他の方法においても見るのできない完全な形態でそれ自身との分離を新らしき固有の形態でエクジステンツに示してくる如き哲學をもたねばならぬ。カントの辯證法的圖式は神のエクジステンツとしてイエス・キリストの存在と神それ自體のイデア的存在との關係を相互否定の辯證法的内面的關係において示すものとして最も大なる意味をもつてゐる。イエス・キリストは神の新らしき固有の存在である。神それ自體が最も完全なる姿においてそれ自身を全體的に新らしき現實の存在に啓示せる存在である。しかし神の自己否定であるから神は否定せられてゐるといへる。神に祈らねばならぬ。神はイエス・キリストに最も完全な姿でそれ自體を全體的に啓示し、イエス・キリストをもつてその最も完全なる存在とするのであるけれども、啓示したと思ふときはすでに過去の死せる事實である。これを否定して新らしき啓示を求めねばならぬ。この辯證法的矛盾關係を示すのがカントの睿智的時間空間の辯證法的圖式を媒介にして示される純粹活動であつて、人間から神へと神から人間へととの辯證法的關係を最も根源的具體的に示す點においてイエス・キリストの信仰をば最もよく示すのである。ヘーゲル哲學のイデアの即自的對自的存在を人間において示すといふこともこゝにおいて最もよく見られることであらう。かういふ *an und für uns Sein* のイエス・キリストが天の父は我よりも大なりといつて神に祈つたところに神と人間との根源的本質的關係において作られる生命の歴史があり、歴史の根源がある。歴史主義の歴史哲學が成り立つのである。

私は前節で、客觀的世界は死んだものではない、それ自體神において歴史を作るものである、すべての存在は歴史的主體である、しかし我々はなほこれを見る眼をもたねばならぬのであるがこの眼はこの世界の内にあることはできず外にあるものでなければならぬ、點について述べた。世界の存在はすべてみな神の存在としてそれ自體で獨立に神の歴史を作るものである。絶對的歴史的主體であり、絶對的個性であるといふ外ないのである。ライブニツツの

單子の世界などはこれである。しかしこれも思辨哲學的見方である。そのかぎりにおいてはこれを超克する心それ自體の自由の立場がなければならぬ。この自由の立場においては我々は思辨的歴史的世界を超克し、その絶對的主體の個性を我々自身の自由の純粹活動の個性とする立場をもつのである。カント哲學の自由の徹底において認められる個性はこの立場において認められる個性として、我々は物を見音を聞く場合にイエス・キリストは鮮かに神において見聞きするやうに、我々はたゞ他人と社會的に交際してゐるに過ぎないところに歴史的主體として神の歴史を作れるものを神とゞもに知るのである。我々人間の歴史にはこのやうなイエス・キリストの歴史的世界認識の立場がなければならぬのである。キリスト教では三位一體の哲學がある。すべての存在はみな神の歴史的主體であることを認め、光榮ある神の世界であることを認めるのである。しかし眞のキリスト教の生命はかゝる思辨的形而上學にあるのではなく、キリストが天の父は我よりも大なりといつて神に祈つた點にあることは人の知る通りであるが、これは祈るイエス・キリストにおいて一層深き世界の生命があり、人間の眞の歴史が心の自由において作られるからである。キリストの誕生は時がなくなり歴史がなくなつたときに見られる。しかし同時にまた一切の時を生じ歴史をそれ以上に新しく永遠の姿において作るのであつて、神に祈るイエス・キリストは時々刻々にこれを實現し、生れ更つて歴史を新たにするのである。キリストにはまだ哲學はなかつたといへる。しかしその生涯は最も哲學的であつて、カントの自由の哲學は祈るイエス・キリストにおいて活き、このキリストが復興するカント哲學を眞の意味においてもち、その歴史哲學を永遠に生命あらしめるといへる。

キリストが西洋の社會を作り歴史を作るといふことは我々の深く考へねばならぬ問題であると思はれるのである。カント哲學でも神と人間との關係についてなほ思辨的であるかぎりではなほかういふことはいひ得ない。深き自覺を要求されてゐるといへる。私はたゞ復興するカントの自由がこの問題を解決し、具體的にはカント哲學として神の理念の自由理念への辯證法的先驗演繹を明かにするとき、カントはいよ／＼イエス・キリストの作る歴史的社會の問題

を正式に哲學の問題として解決すべき立場に達すると思ふ。

カント前の哲學においても、またカント後の哲學においても西洋哲學としてはすべての哲學はみなこの問題を研究するものといつてよいのであるけれども、カント前のライブニッツ哲學を見ても分るやうに思辨哲學であるからこの問題を直接の問題として攻究すべき立場に達してゐぬ。カント後のヘーゲル、フッサール、ベルグソン哲學といつてもその思辨哲學たるかぎりにおいては同様はこの問題を直接の問題として攻究すべき立場に達してゐぬ。ヤスパーズの哲學はこれ等の哲學者と異なつて質的であるからこの問題を直接の問題として取り扱ふべき立場にあるといへるのであるけれども、その最後の場合として神と人間の關係を考へる「超出」は矢張り思辨的であるからこの問題を直接的に把握すべき立場ではない。かういふ點においては私は今日の大體哲學においてはなほ問題があると思ふのであつて、キリスト教者としてイエス・キリストの作る歴史的社會を明かにすることは哲學的には容易ではないことを知る。復興するカントの自由が初めてこの問題を直接的に把握するものと見られる。勿論カントもありしまゝの哲學は思辨的であるからこの問題を直接的に把握するものとしてイエス・キリストの作る歴史的社會を明かにするものとはいへぬけれども、カントはこれ等の哲學者と異なつて思辨を超越して自由を明かにしてゐるのであつて、その自由において最後の場合に陥れる思辨をも超越すべき方法をもつてゐるのであるから私はカント哲學にこの問題を直接の問題として把握し、イエス・キリストの作る歴史的社會を明かにすべき榮譽を興へてよいと思ふ。カントがその方法を徹底して明かにするイエス・キリストにおいて初めて我々は歴史的社會の根本問題を哲學的に把握することができる。

しかしカントはこの問題を解決したのではない。これから進んで解決すべき正常の方法を示唆したのである。この行先のカント哲學の事業は如何に大きいか。私は復興するカントの神の理念の自由の理念への辯證法的先驗演繹を考へるにあつて、カント哲學固有の辯證法的先驗的圖式概念を西田博士の「永遠の今の自己限定」に媒介して考へた

關係上、こゝにイエス・キリストにおいて考へらるべき純粹活動を先生の純粹經驗に聯關して考へ、先生の純粹經驗の哲學がこの場合に考へらるべき最も有力なる一つの哲學であることについて暴評になるかも知れぬけれども一言して復興するカント哲學に事業の多いことを示唆しておきたいと思ふ。

私は先生とは考へ方がやゝ異なり、カントの批判哲學から出發してその中心問題である先天總合判斷の最高原則の問題を吟味して遂にこの純粹經驗または活動の概念に達した。此回の歴史哲學の問題に關するこの小論文はそれ自體獨立の目的をもつて起稿したものであつて、前論文、「カントの先天總合判斷の最高原則について」の拙稿の續稿として書いたものではない。しかしすでに論じた如くカント哲學の最高の問題として起らねばならぬ神の理念の自由の理念への辯證法的先驗論理の演繹の問題はカントの先天總合判斷の最後の最高の問題として前論文の往きつく先の最後の問題を解決するものである點で私は此回のこの小論文は前回の論文の問題を承け繼いでカントの先天總合判斷の最高原則の問題を解決するものとなつてゐると思ふ。辯證法であるかぎり先天總合判斷といふことはカント自身もよくその性格を明かにしてゐぬ。先驗的であつてフツサールの本質直觀にも先立つ純粹經驗に關係するものとして辯證法的先驗的に深き特徴を有するものでなければならぬ。

私は西田先生の純粹經驗はこゝに見られるものとして眞の人間としてのイエス・キリストの經驗であり純粹活動であると思ふ。眞の哲學はこの活動において見られる神の *an und für sich Sein* としての正しき人間から出發してそのなすべき仕事を明かにする點で新らしく攻究さるべきものであることを教へるのが復興するカントである。歴史は第一この場合における自我の立場から十分考へられねばならぬ。現象學は勿論實存哲學といへども自己意識から歴史を見るものとしてこの自我の立場から歴史を見るものといふことができるであらう。しかし眞の歴史はそれよりも歴史的世界において歴史を見るものでなければならぬ。私は先生がライプニッツの「豫定調和を手引として宗教哲學へ」の論文などにおいては専らこの方面から歴史を見られてゐると思ふ。勿論この方面から見る場合においても自己意識

が問題となるからそのかぎりにおいては自己意識から出發して自己意識に返る點がある譯であり、同様にまた歴史的世界から出發してこの世界に返る論理もある譯であるけれども、眞の歴史はこの自己意識から見る立場と歴史的世界から見る立場との相互媒介による辯證法的關係において見られねばならぬ筈であつて、私は西田先生は折角この方面に向つて進まんとして驚嘆すべき哲學的研究をつまれてゐる中に忽焉として易筮せられたと思ふ。惜しみても餘りあるといふのは先生の易筮であると思ふが、兎に角先生の偉大なる研究の跡を見ても、カントがその批判の徹底によつて發見するホモ・ノビリスの哲學が純粹經驗の歴史哲學として如何に廣大なる體系の哲學に發展せねばならぬかは分ると思ふのである。私はこゝで先生の純粹經驗について詳細に論ずる暇のないのを遺憾とするけれども、先生の純粹經驗を私は復興すべきカントの自由の辯證法的純粹活動において見たいと考へる。カントではこの自由の活動からすでに述べたやうに絶對自我及び世界を生じ、その辯證法的關係によつて自覺的に經驗を完了するのである。佛教哲學的にいへば起信論の如來藏の世界と唯識論の自我の實存哲學の相互媒介による辯證法的純粹活動または經驗において見られることであつて、この哲學において我々は初めて歴史的社會は如何なるものであるか、人間及び世界が如何なるものであるか、またこれに媒介せる國家が如何にして永久に作られ世界平和の永遠の基礎となるかといふことを知るるのである。このやうな意味で私は「眞實の日本」では佛教及びキリスト教の信仰及びその哲學に媒介せる我が國のことを考へて見た。

私は以上述べた立場からデイルタイなどの歴史派の歴史哲學を批判しながら自分の歴史哲學を明かにすることができるとともに、それがまた如何なる國家を作り世界を作るかを知ることができると思ふ。思辨哲學ではまだ歴史の問題を正しき意味で具體的に把握せぬ。すでに述べたやうにページルにしてもフツサルまたはベルグソンにしても正當な意味で歴史の問題を把握するものでないことは勿論であるが、これ等の哲學者とは實存哲學者としてその立場を異にし、人間が神になる以上に神が人間になる問題を中心にして考へるヤスパースもその最後の立場である「超出」

においては再び思辨的同一哲學となつてゐるから、そのかぎりにおいては歴史の問題を正當に把握せぬ抽象的觀念論になつてゐる。今日八益しい共產主義といふやうな問題も思辨的同一哲學で考へる以上は神の國においては人間は根本的哲學的に神と同一であるから財産については共產主義を採る外ない。殊に今日の世界は二回の大戦をへて人間の解放といふことは國內的にも國際的にも歴史を支配する大勢となつてゐるから、これと聯關して共產主義といふことは世界歴史の大勢のやうになつてゐるのみでなく、正直にいふときはこれ等の諸大家の西洋哲學はその思辨哲學である點で眞實においてはこの主義の同情者支持者の立場にあるものとなつてゐるから、今日の共產主義運動は非常に強い哲學的基礎をもち根柢を興へられてゐる事情があるのである。しかし思辨的同一哲學は何も哲學上の最後の最高の立場にあるものではなくこれよりもなほ深く實存的歴史哲學がある筈である。この方面の哲學においては思辨的同一哲學において人間が一切を神に返せる共產主義の成り立つのに對して一切を神から興へられたる資本主義が成り立たねばならぬ筈であるのみでなく、哲學の原理としては思辨的同一哲學と實存的歴史哲學との相互媒介において見られる辯證法的純粹活動を實存哲學の立場において地上に實現せねばならぬのであるから、財産に關してはこの兩主義の相互否定の辯證法的媒介による社會政策の徹底を資本主義の地盤の上に實現せねばならぬのである。私はかういふ點においては今日の我々はカントが思辨的同一哲學を超越せる實踐理性優位の哲學を打ち立てたところにまだ／＼深く注意せねばならぬ問題があると思ふのであつて、今日のやうに理論的にも實際的にも押しつめてきた世界では、いよ／＼落ちてついでカントが批判哲學を創めた精神を十分に徹底しながらその奥底において見られる自由の純粹活動の天地を貫く眞理においてイエス・キリストを見極めその純粹なる血の心臓に高鳴れる愛から出發してかういふ問題を解決する外ない。これが私はカント哲學の眞實に教へるところであると思ふ。復興するカントは科學原理の批判から人間を錬り込みつゝかういふ問題を適正に批判し解決すると思ふ。

人間の行爲に深き注意を拂ふ米國のブラグマチズムの哲學には私はイエス・キリストを通して復興するカントの自

由と深く一脈相通するものがあると思ふ。米國のやうに多くの點においてすでに國內的國際的に解放せる自由國はこれから解放せねばならぬ國に比較するときは、すべての事情はあまりに違ふから學び難い點があるかも知れぬけれども、そこにはすべての解放運動をして無駄なく危険なからしめるものがあると思ふ。これ等の問題は多くは社會學國家學經濟學財政學問題に屬する。しかしその根本において哲學問題であることは否定すべからざるところであつて、問題は寧ろ純粹歴史哲學の問題として精確にその本質を明かにする點にかゝつてゐると思ふ。思辨哲學ではどうしても明かにすること能はざる問題がある。カントがこれを超越せる實踐理性優位の哲學をカント以上に徹底する辯證法的純粹活動において初めて正當に解決しうべき問題である。デイルタイの歴史哲學の根本概念である了解もなほ人間から神への思辨哲學的なる點において多くの問題を殘してゐる。思辨的に歴史的世界を見るに止まつてゐる。しかしイエス・キリストはそれよりも深く見て歴史問題を提供してゐる。聖書にある「初めに言葉ありき、言葉は神ともにもありき、言葉は神なりき。」といふ言葉はこの場合に見る純粹活動において最も深く理解さるべきこと柄であつて、受肉の問題は人間の言葉、具體的には民族の國語を哲學本來の問題とする。民族及びその國家において人間及びその世界は最も深く現實具體的に理解される。民族及びその國家の哲學的理解なく自覺のないことが今日の世界歴史をして根本的に動搖せしめ混亂せしめる根本原因となつてゐる。民族及び國家の問題は國家學政治學の問題として科學的に攻究さるべき問題であるが、それとともにそれよりも以上に哲學の問題として眞面目に攻究さるべき問題である。私は復興すべきカント哲學はイエス・キリストの經驗の學としてかういふ點でも根本的に歴史哲學の問題を提起すると思ふ。我々は神の福音を傳へる聖書をもつてゐるが、その聖書は具體的には民族の國語によつて傳へられたる聖書として神と人間との關係を民族において具體的に實現すべきことを教へるものであらねばならぬのである。こゝに民族の深く自覺すべき問題がある。最初に述べた言葉でいふならばヘーゲル哲學のイデアがその *an und für sich Sein* の立場が *an und für uns Sein* の立場に轉廻するエクジステンツの問題を理解するところに問題がある

といへるのであつて、イエス・キリストはこのエグジステンツの徹底において自由の純粹活動の歴史を作るのが民族の現實の課題であることを示し民族の愛に高鳴れる血の心臓において一切の問題を解決すべきを教へる。

さて私は以上でカントの神の理念の自由の理念への辯證法的先驗演繹の純粹活動から極く簡單に歴史哲學及びその問題について瞥見した。これから進んでいよ／＼この論文の初めに掲げた歴史主義及び歴史哲學などの問題を詳細に論ずべき順序になつてきたといへるが、この論文で論ずべき本質の問題は大體すでに論じたから、これまでと違つて説明は容易くなるが相當長いものになる豫想である。したがつて一個の著述ともすべきものであつて、本誌のやうな研究誌に載せることは最早その必要のないものになつてきた。大體如何なる問題を如何に論ずべきかは以上述べたところで明かなところであるから、私は本誌では一旦これで切りあげて餘は著述のつもりで研究をつゞけるやうにしたいと思ふ。なほ私はかういふ歴史哲學から如何なる國家が作られるかといふことに深き關心をもち、失なはれた原稿眞實の日本」と共に孔子の作る支那についても研究してきたが、これについても發表は別の機會に譲ることとする。(完)

日本學術會議會員候補者推薦の件

日本學術會議の第二回會員選舉に當り、本會は委員會の議により、

京大文學教授 矢田部 達郎君

東北大文學部教授 三宅 剛一君

を適任と認めて推薦致しますから、御支援願ひます。

會員各位

京都哲學會委員一同

ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

A Problem Concerning the Philosophy of History

By Tomoda Onishi

German speculative philosophy in general holds the finite to become eternal truth in the idea. The ultimate concern of philosophy, however, lies still deeper, which cannot but ask: in what particular way the finite, thus 'aufgehoben' in the idea, would be found? This is the reason why the analysis of the being-structure of the idea, which has 'aufgehoben' the finite, should be necessitated. The idea, involving in itself all the finite, develops itself out of itself, and makes the finite, not merely finite, but also an actuality of concrete life with the infinite immanent in it. It is thus that it has to be spoken not only of the spatial wholeness of the infinite which transcends the temporal totality of the finite, but also of the notion of the dialectical transcendental schemata of time-space, through which space becomes immanent in time by way of its self-negation of self-transcendence; and Kant's philosophy, with its doctrine of the primacy of the practical reason, has really, though scarcely noticed hereto from this point of view, reason to be revived in these days, overpowering the Hegelian speculative philosophy, and Kant's philosophy itself will be found not to be devoid of the way for that either, if we consider this medium of the notion of the dialectical transcendental schemata.

To begin with, in the case of the speculative intellect such as Hegel's, the so-called self-consciousness is nevertheless nothing but the mind treated as a transcendental object, whereas Kant, stressing

the primacy of the practical reason, grasped the mind itself in its direct immediateness, and the ' I ' as the true self-consciousness. The body, which is its immediate negative momentum, was also rightly given account of by Kant, who exhibited man in the antinomy of freedom versus necessity. With all that, when he, having disposed of this antinomy, proceeded to the region of eternal freedom, he also fell into a sort of speculativeness regarding the relation between God and man. This position of his should be broken through, which would be achieved, if we are not necessarily to depart from Kant, through dialectical transcendental deduction of the idea of God to that of freedom by the medium of the said dialectical transcendental schemata. In this way, not solely the Kantian philosophy, but the German speculative philosophy in general, would be brought forward some steps farther, and thus would be enabled the restoration of freedom, which, I am afraid, has been lost sight of in the train of German philosophy. The philosophy of history will not be allowed to remain indifferent to the purport of the problem here discussed.

* For the Japanese original of this article, see Vol. XXXIII, No. 5, 9 & Vol. XXXIV, No. 4.